

超短期国際交流プログラムによる人材創生

【取組概要】

本取組は、実績ある教員個人のネットワークと知識、経験を連携、組織化することで、本学にない独創的かつ斬新な海外との国際交流プログラムの開発、推進を目的としています。具体的には、本学部が教育研究に力を入れてきたアジア地域の政府、大学、研究機関との従来にない 2 週間程度の早期・超短期国際相互留学制度（相互：日本→海外（アウトバウンド）・海外→日本（インバウンド））の協定締結・運営を、本学国際センターのバックアップを受けながら実行します。

現在、日本国内の国際化、特に地方の国際化によってアジア人の長期滞在、永住が急増し、彼らに対応できる人材の確保が急務となっています。本学部ではこれまで国際派人材を育成し、地域リーダーとしての地方公務員を送り出してきましたが、本取組によりさらなる国内の国際化に対応できる人材を創生します。

【取組実績】

本取り組みは、「国際感覚に富み、且つ地域密着型の人材育成」を目指し、2017 年度から 2019 年度まで実施されたアジア地域への超短期（1 週間～2 週間）留学制度である。実施期間中は、延べ 169 人の総合政策学部生がインドネシア、韓国、カンボジア、ベトナム、スリランカ、ロシアへの一週間程度の現地留学に参加した。留学期間中は、参加学生が英語のほかに本学部において学習することができる外国語であるマレー・インドネシア語、韓国語、ロシア語を実践的に使用し、日本国内における学びを実際に現地で活かす機会を提供することができた。その意味で、学生にとっては国際人としての一歩となった。加えて中・長期留学への展望を開くという観点からも学生にとっては有益であったといえる。

また、実施最終年度には、インバウンドの試みとしてインドネシア及びカンボジアの研究者を本学部に招聘し、今後の交流の活発化について意見交換を行ったことも本取り組みのさらなる発展に寄与すると考えられる。

本取り組みが目指したアジア地域における交流の活発化という点では、実施期間中に多くの学術・政府機関とのプログラムを実施することができた。例えばインドネシアにおいては、大学、民間シンクタンク、国営企業、省庁などとのネットワークを確立することができた。参加した学生にとっては、学習する語学を駆使し大学における学びの方向性を確認する機会となった。

座学で習得した語学を実際に使用し、現地において異文化に触れることができるこのような取り組みは、総合政策学部が目指す「高いレベルの外国語運用能力」や「多様な異文化を理解受容できる包容力」の涵養にもつながるものであり、今後も「超短期国際交流プログラムによる人材創生」を目指していきたい。

(現地での様子)



スリジャヤワルダナプラ大学の学生の皆さんとの集合写真
(Field Studies スリランカ/保坂 俊司教授)



国立ハングル博物館(ソウル市)でハングルの歴史を案内してもらう学生たち
(Field Studies 韓国/李 熒娘教授)



現地のナショナル大学でリサーチ内容の発表後、表彰されている様子
(Field Studies インドネシア／加藤 久典教授)



伊賀上教授、調査メンバーとチュヴァシ大学の先生方（チュヴァシ共和国）
(Field Studies ロシア／伊賀上 菜穂教授)